

E・パークの崇高美学をコロナ以後の時代にひらく ——新たな〈危機の時代〉への応用可能性

桑島 秀樹

はじめに

本稿は、2022年3月20日にZoomオンライン（運営：日本大学商学部・瀧田寧）で開催された、日本イギリス哲学会第46回研究大会のシンポジウムⅡ「雑談・孤独・崇高：コロナ禍以後に向けたイギリス哲学・思想の射程」（発題：竹澤祐丈、報告：①林誓雄、②望月由紀、③桑島秀樹、総括：奥田太郎）における同タイトルでの第3報告（桑島）に基づき、それに加筆・整理を施したものである⁽¹⁾。

この報告で展開した議論を簡単に概観しておけば、以下のようになろう。近代の「危機の時代（ことに18世紀）」の学としての「美学＝感性の学（aesthetics）」という考え（吉岡洋／外山紀久子）⁽²⁾を念頭において、E.パーク『崇高と美の探究（*A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*）』（1757年／第2版：1759年）⁽³⁾における〈崇高〉の規定——〈美〉と対置される——を整理・確認する。

(1) 南山大学社会倫理研究所（代表・奥田太郎）編『社会と倫理』第37号（奥田／南山大学 [2022]）には、「特集 コロナ禍をめぐるあれこれを考える」枠が設けられ、奥田の「緒言」（pp. 1-2）とともに、すでに林の論考「雑談の意味と意義」（pp. 35-52）、望月の論考「ケアの思想としてのホップズーコロナ時代の孤独な個人について」（pp. 53-61）の掲載がある。ぜひ併読されたい。なお、シンポジウム主催学会の刊行する学術誌最新号（日本イギリス哲学会 [2023]、pp. 93-100）にも各報告の要旨と総括からなる全体報告がある。

(2) 外山紀久子（埼玉大学大学院教授・美学、芸術学／科学隣接領域研究会メンバー）「医術と芸術：浄めのアート走り書き（～新型コロナ感染症を考える～）」、日本科学協会ブログ、2020年6月17日付電子版記事。
URL: <https://blog.canpan.info/kagakukyokai/archive/643> [最終閲覧：2023-02-21]。

(3) パークの崇高美学論については、以下の書を参照のこと。桑島 [2008] および中澤・桑島 [2017]。なお、『崇高と美の探究』邦訳には、中野訳（パーク [1973/1999]）、大河内訳（パーク [2012]）などがある。本稿内の『崇高と美の探究』からの引用箇所（訳文は筆者・桑島）では、オックスフォード・クラレンドン版パーク全集第I巻（Burke [1997]）所収のテキストを参照している。なお、本書は、パート（部）とセクション（節）によって文章がパーク自身の手で細分化されているので、まずその部・節の番号と節のタイトルを記し、その後、Burke [1997] の該当頁を明記してある。

さらにそこから、歴史概念としてのパーク的な〈崇高〉を、現代社会・現代文明を批判する分析概念として蘇らせる幾つかの試みを紹介・検討する。換言すれば、現代（あるいは未来）世界の様相を鋭く読み解く、感性的認識モデルとしての〈崇高〉の可能性を探ってみるわけだ。その作業の過程で、われわれは、〈孤独〉と〈社交〉の対比を軸としながら、最終的に、コロナ以後の社会における世界表象のあり方ならびにコミュニケーション倫理といった問題に触れていくことになるだろう。

1. 〈孤独〉の諸相とその積極評価——〈崇高〉との関連を念頭に

〈孤独〉と〈孤立／隔絶〉の違い——孤独の効用

本稿にまとめなおした筆者の第3報告には、第1報告（林）と第2報告（望月）を承けつつ、〈崇高〉という美的／感性的な概念に寄り添いながら——第1・第2報告ではやや分が悪いように見えた——〈孤独〉をある面で積極的に評価してみようという意図もあった。そこで議論をまず、〈孤独〉の諸相の整理からはじめた。さしあたり、望月 [2022] の議論の端緒ともなっていたH. アーレント（『全体主義の起原』）の孤独の整理法すなわち「隔絶（isolation）」「孤立（loneliness）」「孤独（solitude）」の三区分別⁽⁴⁾を概観することにより、「孤独死」「独居老人」「引きこもり」といった現代社会の〈孤独〉問題は、所属共同体からの「孤立（loneliness）」という物理的なそれが主要因であって、社会福祉や経済的損失など国家施策と密接にかかわる実践的かつ政治的な問題だと理解できた。そして、この種の問題の解決のため、2018年以降、たとえば英国や日本では「孤独・孤立問題担当省」⁽⁵⁾などが設けられた事実にも触れた。

しかしながら他方で、今日では、「おひとり様」あるいは「独身貴族」による「孤独のグルメ」⁽⁶⁾が流行っていてもいる。まさに嗜好品のごとく独りで過ごす時間を充実の「余暇」とみて、それを享受する態度に一定の精神的な価値を認めることもできよう（國分功一郎）⁽⁷⁾。それは思考を深

(4) アーレント [2017]、「エビローク（英語版第13章）」（特に、pp. 346-354）を参照。ここでアーレントは、「孤立はテロルの始まり」で、それは全体主義以前の「無力」な状態だという。彼女はパークの言を引き、「（権力）とは「協同行為（acting in concert）」（アーレント [2017] , p. 296, 346）の結果だともいう。アーレントにおける「行為」とは一個の主体のみにかかわる「製造」との対概念だった。

(5) 2018年、英国テリーザ・メイ首相により「孤独問題担当大臣（Minister for Loneliness）」の新設（ヴィンセント [2021] 第6章を参照）。2021年、岸田文雄首相も「孤独・孤立担当政策大臣」（地方創生、女性活躍、子ども政策など「内閣府特命担当大臣」が兼務）を新設した。

(6) 「孤独のグルメ」は、もともと1990年代半ばより連載された久住昌之原作（谷口ジロー作画）の漫画タイトル。この原作に基づき2012年よりテレビドラマ・シリーズ（テレビ東京、松重豊主演）が制作され大ブレイクした。主人公は、雑貨貿易商を営む中年の独身男性・井之頭五郎（酒は飲めないが、愛煙家）。出先で見つけた大衆食堂で独り、供された料理をめぐって自己対話を重ねる愉楽の食事シーンを描く。

(7) 國分功一郎（編集・文：菅付雅信）「嗜好品は思考に不可欠な「孤独」を生み出す。哲学者・國分功一郎」、DIG THE TEA、2021年12月23日付電子版記事。URL: <https://dighetea.com/2021/12/koichiro-kokubun/> [最終閲覧:

化させる好機であり、見方を変えれば、積極的に評価することもできるからだ。

したがって、〈孤独〉とは個人の尊厳を保つものであり、人間にとって積極的意味をもちうるものでもあろう。ここでは、たんなる物理的・空間的な「孤立／隔絶」ではなく、精神的構えとしての〈孤独 (solitude)〉がはらむ文化的・倫理的な価値が問題となつてこよう。

吟遊詩人スナフキンの孤独——ムーミン谷への「旅」の意味

筆者はこの〈孤独〉が担いうる精神的な価値をさらに確認するため、フィンランドの画家で児童文学者T. ヤンソンによる『ムーミン』シリーズに登場する旅する詩人音楽家スナフキンを例に引き、異郷への旅とその道程であじわう孤独のもつ意義を確認してみたい。

たとえば、『ムーミン谷の仲間たち』の冒頭「春のしらべ」⁽⁸⁾から。スナフキンは、冬は南の自分の故郷へ帰り、ふたたび春から秋にかけて、ムーミントロールたちの住む北の「ムーミン谷」にやってくる。以下の引用箇所は、春になり、スナフキンが谷に戻ってくる場面であり、旅の〈孤独〉が芸術へと昇華される様子を物語る場面でもある。

三月のすえの、あるよくはれた、おだやかな日のことでした。北へ北へとめざしてきたスナフキンは、まだ山の北側の雪がきえのこっているあたりまできました。

かれは、南の故郷をでて、小鳥がさえずっているのなんかをききながら、だれにもあわずに、一日じゅう歩いてきたのです。

… (中略) …

「こりゃ、歌をつくるのもってこいの夕方だぞ」

こう、スナフキンは思いました。あたらしい歌です。——さいしょの部分はあこがれ、つぎの二つの部分は春のかなしみ、そのあとはひとりで気ままにぶらつくことの大きなよろこびです。

… (中略) …

ムーミントロールは家において、スナフキンがくるのをまちこがれ、スナフキンを崇拜しているのです。それでいて、いつでもいうのでした。

「もちろんきみは、自由でなくちゃね。きみがここをでていくのは、とうぜんですよ。きみがときどきただひとりになりたいという気持ちは、ほく、よくわかるんだ」って。

… (中略) …

「ああ、あいつはいいやつだなあ、あいつは！」

2023-02-21]。なお、國分は嗜好品を人間の生の「尊厳」の象徴たる「バラ」に喩えて、「わたしたちはパンだけでなく、バラも求めよう。生きることはバラで飾られねばならない」(『暇と退屈の倫理学』)とも説く。崇高と嗜好品の関係にかんするパーク美学に基づく考察は、桑島 [2020] も参照のこと。

(8) ヤンソン [2011]、pp. 5-28。

スナフキンはこうつぶやいて、また道をつづけました。

「うん、あいつはいいやつだ。あのムーミントロールってやつは、まったくおセンチだからなあ。だけど、いまはあいつのことは考えまい。あいつはほんとにすばらしいムーミンだけれど、いまはあいつのことを考えてはいけないんだ。今夜は、ぼくのあたらしい歌のことだけを考えること。あしたはまたあしたの風が吹くさ」

まもなくスナフキンはムーミントロールのことは、すっかりわすれることができました。
(ヤンソン [2011]、pp. 6-9)

この場面のすぐあと、スナフキンが森の小川で野宿するシーンが描かれる。そこでは、いつでも自分の食事は自分で煮炊きすること、そして、余程のことがないかぎり、他者のために料理もしないし、共に食事もしないこと、これらが彼の一人旅のルールであることが語られる（ヤンソン [2011]、p. 11）。会食も含め、あえて他者との交渉を断つこと——「憧れ」「崇拜」の対象となることも拒まれている——によって得られる、完全なる精神的自由を求める姿がここにはある。そうした状態に没入することで、一種の内省的思索が導かれ、最終的に芸術創造さえも可能となるのだ。

2. 近代化と〈社交〉と〈孤独〉の精神史——ヴィンセント『孤独の歴史』に依拠して

啓蒙運動と文明の徳としての〈社交〉

近年刊行のD. ヴィンセントによるきわめて包括的な研究書『孤独の歴史』(*A History of Solitude*, 2020)を参照したとき、〈孤独〉とかかわる様々な文化事象に思いを馳せることができる。本書は、近世・近代から現代までのヨーロッパ文化圏、ことにイギリス諸島文化圏で展開された〈孤独〉をめぐる思索の歴史を、広義の「近代化」に伴う社会変革との関係から多面的に描き出したものである。わけてもここでは、個人と共同体の関係をめぐり、精神医学、自然散策、芸術創造、宗教体験など種々の視角から考察がなされている。

「ひとりでいるときの精神状態や、孤独と社交を行き来する力は、近代化が進む世界で暮らすその後のすべての世代が取り組まなければならない問題だった」（ヴィンセント [2021]、p. 30）とヴィンセントが言うとき、18世紀末、『孤独について（*Über die Einsamkeit*）』（1784-1785、全4巻）をものした、英国王ジョージ3世および故フリードリヒ大王の侍医J. G. ツインマーマンが念頭におかれている。精神医学者であった彼は、当時の知識人（たとえばCh. ガルヴェなど）との交遊もあったゆえに、「啓蒙運動」と連動した〈社交〉を重視し、〈孤独〉には否定的であった（ヴィンセント [2021]、p. 14）、と。

ヴィンセントはいう。「義務と利己心が共謀することで、孤独は有益な暮らしの周縁に追いやられた。……一七世紀終わりには、商業階級が豊かになり影響力を強めつつあったことを反

映して、黙想と行動という競合する徳をめぐる長年の論争の重点が変化する」(ヴィンセント [2021]、pp. 14-15)、と。むろん、ここでいう「黙想」は〈孤独〉の、他方で「行動」は〈社交〉の謂いであり、〈社交〉こそが商業的な文明(ないしは市民)社会の「徳」と見なされる時代の到来という歴史認識の反映であろう(ここでは、J. G. A. ポーコックが「シヴィック・ヒューマニズム」概念を用いて論じた18世紀イギリスにおける「作法」の文明社会論が想起される⁽⁹⁾)。

近代化の進展する世界にあっては、先に引用したように「孤独と社交を行き来する力」が問われている(ヴィンセント [2021]、p. 30)。だから、〈孤独〉を主題とするヴィンセントの書では、商業社会の「徳」たる〈社交〉への偏重という事態に対する批判もまた——ある意味正当に——なされるのだ。彼はいう、「孤独をめぐる長年の論争は、啓蒙運動で社交性が重視されたことで、改めて切迫したものになる。人と人の交流は革新を後押ししたが、そのために知的探求と自己発見の余地が少なくなった。社会的な交流は創造性を助長するが、引きこもって内省する機会がなければ気が逸らされ、深みのない生き方になってしまう可能性もある」(ヴィンセント [2021]、p. 33)、と。

ロマン派詩人やクエーカー教徒の〈孤独〉——商業的文明社会の〈社交〉に抗して

このような近代化のなか〈社交〉への「反動」として、ヴィンセントが指摘するのは、都市部での人口増加や人間関係の煩わしさを避け、個人が健康回復や内的思索に耽る場である景勝地への旅、そこでの自然散策の称揚である(ヴィンセント [2021]、p. 34)。イギリスの18世紀後半から19世紀を例にとるとき、それはいわゆる「ロマン主義」の詩人たちの芸術運動と連動するかたちで、〈孤独〉の称揚が展開された時代だった⁽¹⁰⁾。ヴィンセントが特に注目するのは、詩「孤独 (Solitude)」(『村の吟遊詩人 (The Village Minstrel)』所収)を綴ったJ. クレアであり、『序曲 (The Prelude)』のW. ワーズワースだった⁽¹¹⁾。彼らが説いた自然逍遥のもたらす

(9) ポーコック [1993] では、近代の商業的な「文明(市民)社会(シヴィル・ソサイエティ)」の進展に伴う「作法(マナー)」への重心移動が説かれる。これは、〈社交〉が「市民」や「文明」の基盤となる新たな時代の到来を意味していよう。なお、外交・交際における「作法」をめぐる近世・近代のイギリス政治思想史については、木村俊道による諸研究が圧巻である。木村 [2010] などを参照。

(10) ヴィンセントは、「孤立 (loneliness)」は、「孤独 (solitude)」の医学的な病理様態として、19世紀以降メラニコリー症状と結びつけられ、「イギリス的な現象」(G. K. チェスタトンによる1930年代の指摘)である精神の病とみなされたことも指摘する(ヴィンセント [2021]、pp. 35-36)。

(11) Clare [1821] と Wordsworth [1850] を参照。なお、ヴィンセント ([2021]、pp. 49-102) は、「孤独よ、汝とともに歩かん (Solitude, I'll Walk with Thee)」と題した第1章で、これらクレアやワーズワースなど19世紀前半に確約した「英国ロマン派詩人」を中心にその「徒歩旅行と孤独」の問題を扱うが、その考察の射程は、以下列挙するような幅広い詩人・文学者・批評家(釣り・孤島・農村・冒険・登山・都市などを主題とする)に及ぶ。アイザック・ウォルトン、ダニエル・デフォー、ジョン・ゲイ、ジェイムズ・トム

〈孤独〉の効用は、スナフキンのそれと近い関係にあるといえよう。

そして、このような自然への孤独な没入をさらに押し進めて考えたとき、有限者たる人間における祈りと超越者との邂逅といった宗教的な「神」体験の問題が前景化してくる。ヴィンセントが慧眼にも注目した、クエーカー教徒（キリスト教フレンド会派）における心的孤独状態の考察はきわめて示唆的だろう（ヴィンセント [2021]、pp. 206–209）。彼らは、完全なる平等と非戦を説く人々だが、神との心内対話の場たる質素な「ミーティングハウス」に信徒として集いながら、しかし各人がおこなう宗教的祈りにおいては精神的孤独をあじわう。静寂のなかで沈黙し、「神とともにひとりである」ために集うのだ。結果として個々人が神に触れることで身体の「震え（クエイク）」が起こるわけだ。

クエーカーのように、人が〈孤独〉へと身を投じる精神的な構えを意識的にとったとき、自然との一体感の愉楽や芸術創造の煌めきに打たれるばかりか、生老病死する肉体をもつ人間が超越者（＝神的なもの／聖なるもの）に触れる啓示的瞬間にも恵まれるわけだ。

ここまで見たとき、われわれは〈孤独〉がもたらす文化的・精神的な意義をじゅうぶんに認めることができるだろう。さて以下では、18世紀アイルランド人だったパークが『崇高と美の探究』で論じた〈孤独〉と〈崇高〉の関係をあらためて確認してみることで、パーク思想におけるこれら2つの主要概念の強い結びつきとその含意を考察することにした。

3. パークによる対比図式〈崇高 vs. 美〉と〈孤独〉の関係

『崇高と美の探究』における〈崇高〉と〈孤独〉

パークの『崇高と美の探究』で説かれる美的範疇としての〈崇高（the sublime）vs. 美（the beautiful）〉の対比には、種々の変奏が認められる。人間本能では〈自己保存 vs. 社交／社会〉、快苦原理では〈苦（「歓喜」へと変容）vs. 快〉、視覚・聴覚では〈巨大 vs. 矮小〉、味覚・触覚では〈苦味／ゴツゴツ vs. 甘味／ツルツル〉、表象度合では〈曖昧 vs. 明瞭〉、芸術ジャンルでは〈詩 vs. 絵画〉、生理・社会活動では〈緊張／労働 vs. 弛緩／怠惰〉などといった対比である。さらに地政学的解釈を施せば、〈辺境／野蛮 vs. 都市／文明〉といった対比も指摘できるであろう。

まさにこうした対比的変奏のうちに、〈孤独（solitude）vs. 社交／社会（society）〉という対比がある。ここには、「苦（pain）の除去」によって生じる、いわば「痛苦反転」⁽¹²⁾でもたらさ

ソン、トマス・グレイ、ジョン・セルウォール、ロバート・ブルームフィールド、ウィリアム・ハズリット、トマス・ド・クインシー、ジョージ・ゴードン・バイロン、ウィリアム・ハウイト、パーシー・ビッシュ・シェリー、メアリ・シェリー、ジョン・キーツ、チャールズ・ディケンズ、ジョン・ラスキン、レズリー・ステイヴン、エドワード・ウィンパー、ロバート・ルイス・ステイヴンソンなどである。

(12) 筆者が〈崇高〉分析で援用する「痛苦反転」という術語はもともと、哲学者・古東哲明（広島大学名誉教授）を代表とする「世界肯定の論理と技法」にかんする共同研究（2004-07年度科研費：課題番号16320006）をおこなった際に、古東より示唆を受けたものである。

れる「歓喜 (delight)」の出来、すなわち負 (マイナス) の正 (プラス) への価値転換の契機が認められよう。これこそ、バーク流の〈崇高〉の奥義であった。バークは次のようにいう。

ときどき孤独になること (a temporary solitude) は、それ自体快適である。このことはおそらく、われわれが、行為 (action) と同時に、哲学的観想 (contemplation) をなすように創られた被造物だということを証明しているのだろう。というのも、社交 (society) と同様、孤独 (solitude) もそれ自体の種々の快 (its pleasures) を伴うからだ。……[しかし] まったき孤独の生活 (an entire life of solitude) は人間の目的 (purpose of our being) と矛盾する。なぜなら、死そのものですら孤独ほど恐ろしくはない観念だからだ。(『崇高と美の探究』第I部第11節「社交と孤独」: Burke [1997], p. 220)

このように、バーク『崇高と美の探究』の内部では、〈崇高〉／〈孤独〉を強調しながらも、結局のところ、〈崇高〉は〈美〉とのバランスであり、したがって、〈孤独〉もまた〈社交〉とのバランスだ、と考えていたとみるのが妥当であろう。

4. 現代的な事象をめぐる〈崇高〉、あるいは「コロナ・シンギュラリティ」

〈崇高〉の歴史概念から分析概念へのモデル化

ここまで、バークの崇高論を参照しながら、〈孤独〉——思想的に〈社交〉と対になるもの——との関係から、〈崇高〉——人間の実存に深く根ざす〈美〉とのバランス——の位置をあらためて確認できた。以下では、バークにはじまる（そして、それを受けてI. カントが『判断力批判 (Kritik der Urteilskraft)』でいっそう思弁的に整理した) 18世紀的な〈崇高〉の近代における深化⁽¹³⁾、換言すれば、そうした哲学的精緻化によって、〈崇高〉がふたたび現代の文明・社会の批判概念としてわれわれの意識に浮上する過程をたどっておきたい。それは、「歴史概念」たる〈崇高〉の現代的な「分析概念」化の先行事例の紹介といってもよからう。

先回りしていえば、以下での考察は、〈崇高〉の核心に——「痛苦反転」とともに——感性認識における「表象不可能性」という契機を強調した解釈の前景化の様相を呈する。これによって、現代を象徴する感性的認識モデルとなった〈崇高〉は、科学技術、歴史的悲劇、そしてコロナ禍のような事態を犀利に批判しうる術語へと変貌するのである。

(13) 本稿では、バークの崇高論がカントに受容され、さらに精緻に哲学的整理がおこなわれたプロセスとその近現代的意義については深く立ち入らない。バークとカントの崇高論の特徴は、桑島 [2008] の第二章「崇高美学の体系化—バークからカント、そして現代へ」(pp. 69-109) を参照。なお、現代的崇高の射程を幅広く簡便に紹介した近刊書として、星野 [2022] がある。

アメリカの〈科学技術的崇高〉とアウシュヴィッツの〈歴史的崇高〉

ここではひとまず、〈崇高〉の現代への実践的応用例として、1990年代に論じられた、「(アメリカの) 科学技術的崇高 (the technological sublime)」(D. E. ナイ: Nye [1994])、ならびに、「(アウシュヴィッツの) 歴史的崇高 (the historical sublime)」(B. ラング: Lang [1992]) といった現代崇高論を紹介しておけばよいだろう⁽¹⁴⁾。

前者「科学技術的崇高」は、「アメリカの崇高」がまず新大陸の野趣に富む大自然のうちに発見されたあと、その第二段階として、技術立国化したアメリカ市民が創った巨大構築物——橋梁や摩天楼、ダム、発電所など——の備える一種の畏怖と驚異を評するために用いられるようになったものだ。他方、後者の「歴史的崇高」は、ナチによるユダヤ人の大量虐殺(ホロコースト)を踏まえて《われわれの想像力をはるかに凌駕する事件が、歴史上現実起きてしまった》ことを感性的に認識する際に生じる思考型に、一種の〈崇高〉の特性——感性的把捉の限界・挫折、それにとまなう事態そのものの表象不可能性——を認めることで考案されたものである。

崇高と〈シンギュラリティ〉——AIとコロナ禍を捉える感性のかたち

さて、以上2つの現代崇高論を踏まえて、以下、現今の世界的な関心事である人工知能(AI)と新型コロナウイルス(covid-19)蔓延(コロナ禍)の問題を考えてみよう。

AIにまつわる「シンギュラリティ(技術的特異点)」——未来学者R. カーツワイルにより「2045年」と具体的に予測されて話題になった——の問題、つまり、人類の全知能を完全に凌駕する統御不可能なAIの顕現というわれわれの想像を絶する事態出来への恐怖である(カーツワイル [2007])。

これは、ディストピア的な近未来イメージの現実化に対する恐怖の感覚のグローバルな共有であり、まさに上記2つの現代的崇高論の延長線上に位置づけられるものではないだろうか(桑島 [2017])。世界のAIの知能総計がある閾値を超えてしまった時点を境に訪れる、まったく予測不可能な世界状況に対して抱く社会不安ないし共同体恐怖の蔓延状態⁽¹⁵⁾ といってもよい

(14) 「(アメリカの) 科学技術的崇高」および「(アウシュヴィッツの) 歴史的崇高」については、桑島 [2008] 第4章「アメリカの崇高と原爆のヒロシマ—自然 vs. 技術」(pp. 187-235) に詳述した。なお、筆者・桑島は、本書で、これら現代的崇高論を「原爆のヒロシマ」表象の問題へと接続することを試みている。

(15) ジュネーブ大学のルソー研究者J. スタロバンスキーの「18世紀研究グループ」が出版した論集(ベールシュトルド/ボレ [2003]) のなかで、同大学の医学史家J. ドゥルーは、1830年代初頭に周辺国でコレラが発生した際にスイス国民のあいだで生じた共同体恐怖と国家の対応策を、「皆が死にはしなかったが、皆が脅かされた」(序章) 事態として考察する。このときスイスが採った政策こそ、アルプスの向こう側で現実に罹患した人々へのまなざしが生む——社会分断や利己主義を加速させる——「非社会化させる恐怖」「野生の恐怖」を巧みに避け、衛生や連帯を強化することにつながる「理性」に統御された「創造的恐怖」の組織

だろう。

このような、いわば「人工知能 (AI)・シンギュラリティ」の問題を、ひとつの感性的認識モデルたる〈崇高〉の視角で斬るとすれば、いわゆるコロナ禍に見舞われた2019年末～23年初の社会的状況 (本稿執筆の2023年春現在、収束の兆しはあるもののいまだ進行中) もまた、同様に、現代的な〈崇高〉に属する感性認識の延長上で捉えることも可能なのではないか。つまり、〈崇高〉を「コロナ・シンギュラリティ」に応用して考えることで、事態の進行の様相やその人類史的な意味を再考するヒントが得られるのではないか、ということである。これが、〈崇高〉とコロナをつなぐ線である。

じっさい、コロナ禍がある程度進行した段階で、「コロナ・シンギュラリティ (あるいはテクノロジカル・シンギュラリティ)」(2020年7月、コンピュータ・ソフトウェア協会⁽¹⁶⁾)、あるいはまた、「コロナが生んだシンギュラリティ (あるいは、コミュニケーション・シンギュラリティ)」(2022年1月、『朝日新聞デジタル』大屋雄裕インタビュー⁽¹⁷⁾)といった概念が世間に流布し、検討をくわえられるようになった事実も指摘できる。

コロナ禍が地球規模で広まった2020年前後は、後の時代から振り返ったとき、人間存在のあり方——感染症問題であるだけに他者とのコミュニケーションにおける〈社交〉／〈孤独〉の問題も含めて——が変容した「特異点」だったと見なされる可能性があるだろう。それは、ちょうど原爆の広島への世界で最初の投下という事態 (ヒロシマの出来) が、その後の人間存在の有様を違ったものに変容させてしまったように。

このように、現代 (あるいは未来) に出現が予期される事象のはらむ「シンギュラリティ」をめぐる感性的認識の思考型を考えたとき、そこに、〈崇高〉のひとつの現代的な応用可能性が認められるのである。ただし、急いで付けくわえれば、ここでの——先行する「科学技術的崇高」や「歴史的崇高」の延長線上に位置づけられる——現代的な〈崇高〉は、あくまでも世界の現在あるいは未来のイメージに対する明瞭な「感性認識」をしめすものに留まっているという事実である。とはつまり、ここでの〈崇高〉は、けっしてAI禍やコロナ禍を解決する特效薬とはならず、あくまでも現状認識を明晰化するヒントの示唆として機能するにすぎないものだということである。

的創出に成功した事例だ (バールシュトルド／ボレ [2003]、pp. 325-332)、と。

(16) 2020年7月2日ハイブリッド開催講演会「レポート：コロナ・シンギュラリティ時代のテクノロジー～コロナ後、テクノロジーは世界・ビジネス・働き方をどう変えるか～」(主催：一般社団法人ソフトウェア協会 (SAJ)・技術委員会)：2020年7月9日付協会HP掲載電子版記事。URL: https://www.saj.or.jp/NEWS/committee/technical/200702_technical_report.html [最終閲覧：2023-03-08]

(17) 大屋雄裕 (慶応大学法学部教授／法哲学・監視社会論) インタビュー記事 (聞き手：竹野内崇宏)、「コロナが生んだシンギュラリティー 個人の自由は小さくなり続けるか」(「未来のデザイン DXは人を幸せにする？」シリーズ第3回)、『朝日新聞デジタル』2022年1月19日付電子版記事。URL: <https://www.asahi.com/articles/ASQ1D5SW1Q14PLBJ003.html> [最終閲覧：2023-03-08]

では、長い歴史をもつ〈崇高〉概念のはらむ別の要素のうちに、もっと積極的な「処方箋」的な可能性は望めないだろうか。以下、本稿の「おわりに」において、もういちど18世紀人パークの説いた〈崇高〉に立ち返り、ここまでの議論とは別の思考に導くようなヒントを掘り起こし、他の新たな視角からの積極的な応用可能性を探ってみたいと思う。

おわりに

コロナ禍が生んだ世界的な感染症への恐怖と不安の蔓延により、マスクの着用や手指・衣服の消毒という——ときに義務となって強制されるもする——行為は、いまや市民生活を送るすべての人々において身体化したルーティンとなったと言えよう。このような他者との身体的接触を極力避ける傾向は、本稿を起こすきっかけとなったシンポジウムの論点のひとつでもあった〈社交〉の様相を劇的に変貌させた。膝を突き合わせた〈雑談〉はほぼ皆無となった。会食／共食は制限され、「孤食」「黙食」が推奨された。日常生活レベルでの〈孤独〉——より具体的には物理的な個人の「孤立／隔絶」——が強いられる場面は激増した。

オンライン（対面）でのコミュニケーションが中断されるいっぽうで、オンライン（遠隔）でのそれは、需要の急激な高まりに応じて高度に技術開発され、情報通信デバイス（あるいは、IoT技術）に容易にアクセスしうる財力・立場・リテラシーをもつ人々のあいだでは加速度的に浸透した。都市生活を送る現役世代——多くの場合に財力・体力・立場・リテラシーをもつ——は、人口集中の都会オフィスを離れて自宅（場合によっては、郊外にもつセカンドハウス！）からのリモートワークに勤しみ、「自然」のなかで遊ぶアウトドア（具体的にはソロ・キャンプやグランピングなど）に積極的に向かった。他方、パソコンもスマホもほとんど触れたことのない年金生活の高齢者たちは——コロナに感染した場合の生命の危険度も高いため——家のなかに引きこもりがちになった。通信機器も自宅の固定電話しかなく、友人・知人との交流は途絶えた。本稿冒頭で触れた、アーレントのいう「孤立」に起因する社会福祉といった実践的・行政的な課題の急激な前景化という厳しい現実風景の現出である。

さて、現役世代にしろ、高齢者にしろ、コロナ禍で強いられた〈孤独〉状態によって、スナフキンやロマン派詩人あるいはクエーカーのもとにあった〈孤独〉のように、ある種の精神的効用が促進されることはあったろうか。たしかに情報通信デバイスにアクセス可能であれば、このコロナ禍進行の副産物として、地方在住者でも、オンラインで気軽に遠方で開催される知的・文化的なイベントに参加できるようになった。地方住まいでは参加の難しかったさまざまな学習機会も増えた。ただし、その一方で、〈雑談〉のような「ノイズ」的なコミュニケーションの重要性をひしひしと感ずるようになったのも事実だろう。筆者の経験からしても、オンライン会議で参加者の顔はPCスクリーン上にずらり並んで見えても、マイクのオフ／オンの切り替えに依存する対話システムは、特定の公的発言のみを許可する仕組みである。つまり、個人あいのファジーなコミュニケーション領域を許容しない、いわば0／1というようなデ

デジタル型の通信型式がベースとなってしまうのである。

ここ数年、自身の「アバター（分身）」をそこに投入できる「メタバース」——オンライン上に創られたコンピュータ・グラフィックによる三次元の仮想現実——への関心が高まっている。しかしながら、人類学者・磯野真穂の新聞寄稿記事（磯野 [2022]）⁽¹⁸⁾ も指摘するように、小奇麗かつ透明で「痛み」のないメタバース世界における、ノイズ——身体・間・無駄・汚れ・曖昧さなど——の完全な締め出しには、やはり人間存在の大切な部分の排除あるいは篡奪への注意喚起が必要ではないか。

このような時代に、われわれは〈孤独〉と〈社交〉のバランスを——どのような塩梅のもと——とっていくべきだろうか、最後に、パークの〈崇高〉の定義を再考しつつ、そこに新たなヒントを求めてみたい。パークの崇高論は、18世紀の商業主義的な文明／市民社会の徳としての〈社交〉＝「快」を斜に眺めながらも、その重心を〈自己保存〉あるいは〈孤独〉＝「苦」のほうに、あえてズラす思考を基盤として成立していた。

これを踏まえ、パーク流の〈崇高〉を導く「歓喜」の実相をふたたび委細に閲したとき、そこには、〈崇高〉に内在する別様の応用可能性が見えてくるように思える。パークは「苦の除去」に由来する高次の快たる「歓喜」を、次のように規定していた。

歓喜 (delight) とは……自己の精神気質が、恐怖の影が差すある種の静謐さ (a sort of tranquility shadowed with horror) のなか、畏怖の感覚の印象をうけたまま (impressed with a sense of awe)、かなり醒めた落ち着き払った状態 (a state of much sobriety) にあることだ。(『崇高と美の探究』第I部第3節「苦の除去と積極的快の相違」: Burke [1997], pp. 212-213)

このように、パークの思考に立ち返って、歴史的な〈崇高〉をその根源的性質にまで深く掘り下げてみたとき、そこには、高揚感ではあるが激情ではない高次の快の感覚、すなわち、「(厳かな) 平静さ／静謐さ」あるいは「醒めた落ち着き／非陶酔的なしらふ顔」といった成熟した心的構えに対する積極評価があるように思われる。

これは、〈社交〉を前提とする華やかな世界にあって、あえて〈孤独〉という痛苦状態に自己を没入させるがごとき、高度に洗練された精神的境地のもたらす感覚のことだと解釈できるのではないか⁽¹⁹⁾。このような複雑かつ繊細な〈孤独〉のレッスンとの対比のうで、〈孤独〉

(18) 磯野は、この記事で、会議前には「雑談をする複数の身体がだらっとそこにあり」、会議開始までに徐々に準備を整えてきたと語る。さらに、オンライン会議は「いるか、いないか、つまりゼロかイチかで、そこに間はない」とも。だから、そこでの身体は「速やかなタスク遂行」に集約されており、IT社会の理想は「一切の汚れと間を廃した、ゼロ・イチを軽やかに行き来する滑らかな身体」なのだと。そして結論として、メタバースは、限りなく自由なようで、じつは最も管理／監視された世界であること指摘する。

(19) 劇作家かつ美学者・山崎正和（大阪大学名誉教授）による『社交する人間—ホモ・ソシアビリス』（山崎 [2003/2006]）——林による論考（奥田／南山大学 [2022]、pp. 35-52）でもD. ヒュームの社交論とともに

——というよりも物理的な「孤立／隔絶」——を強いられたコロナ以後の世界を静かに見つめなおすこと。そのような批判精神の修養からこそ、本来的に痛苦反転的でもあった〈崇高〉を現代に活かす道がひらかれてくるのではあるまいか。

参考文献一覧

[邦語]

アーレント、ハンナ [2017]、『新版 全体主義の起原3—全体主義』大久保和郎、大島かおり訳、みすず書房。
磯野真穂 [2022]、『IT化されていく身体—「メタバース」への危惧（論考2022）』、『中國新聞』文化面（第11面）、2022年2月22日付寄稿記事（共同通信配信）。

ヴィンセント、デイヴィッド [2021]、『孤独の歴史』山田文訳、東京堂出版。

奥田太郎／南山大学社会倫理研究所（編）[2022]、『社会と倫理』第37号。

カーツワイル、レイ [2007]、『ポスト・ヒューマン誕生—コンピュータが人類の知性を超えるとき』井上健、小野木明恵、野中香方子、福田実訳、NHK出版。

木村俊道 [2010]、『文明の作法—初期近代イングランドにおける外交と社交（MINERVA 西洋史ライブラリー）』ミネルヴァ書房。

桑島秀樹 [2008]、『崇高の美学』講談社選書メチエ。

—— [2016]、『生と死のケルト美学—アイルランド映画に読むヨーロッパ文化の古層』法政大学出版局。

—— [2017]、『子らよ、肉の喜びと悲哀を忘るる勿れ—二〇四五年、〈科学技術的崇高〉の逆説』、『世界思想 特集 人工知能』2017年春（第44号）、世界思想社、pp. 98-102。

—— [2020]、『AIは〈味覚／趣味〉変容の精妙さを思考しうるか—E・パーク美学で読む人間的成熟と崇高な思考』、嗜好品文化研究会編『嗜好品文化研究』第5号、pp. 3-11。

國分功一郎 [2011]、『暇と退屈の倫理学』朝日出版。

中澤信彦、桑島秀樹（編）[2017]、『パーク読本—〈保守主義の父〉再考のために』昭和堂。

日本イギリス哲学会（編）[2023]、『イギリス哲学研究』第46号。

言及される——での〈社交〉の前提は、その書の冒頭で1960年代の戯曲を引きながら論じるよう、じつは現代都市生活者の内部に巣くう極度の〈孤独〉の存在にあった。別の著作『演技する精神』（山崎 [1983]）や戯曲作品等を参照して山崎の主張を要約すれば、〈社交〉の原型は、他者と——たとえ「望まぬ殺人」の強制というかたちであれ（E. オルビー『動物園物語』）——なにか抜きさしならぬ関係を結ぶこと、別言すれば、「場の共有」「身体の現前」をともなうリアルな接触をもつことにある、というわけである。なお、山崎自身が〈社交〉の理想モデルと見なし、おそらく彼自身も実践していた茶道の「一期一会」的な交わり／もてなしもまた、まさしくウェットさに濡れない真剣勝負の遊戯的な〈社交〉——山崎はJ. ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』を引く（山崎 [2006]、p. 26）——であり、『醒めた眼で静謐に自己を深く孤独に見つめながら、礼節のなか共有する時空間を遊び尽くす関係』とでもまとめることができよう。これは、九鬼周造の説いた「いき」（『いきの構造』）にも似ており、パーク的な〈歓喜〉に基づく〈崇高〉の境地とも重なってくる。山崎は、その社交論の後半で、パークの同時代人A. スミスが論じた「共感」（『道徳感情論』）の成立背景にも言及し、18世紀当時のイギリス文化圏で展開をみた社交サロンには、共通の古典・歴史・趣味という「身体化された伝統」、つまり社交の場を統御する「雰囲気／気分」としてのゆるやかな規範／倫理が存在していたことをも指摘している（山崎 [2006]、pp. 313-315）

- バーク、エドモンド [1999]、『崇高と美の觀念の起原(みすずライブラリー)』中野好之訳、みすず書房 ([1973]、『エドモンド・バーク著作集1』所収の再版)。
- [2012]、『崇高と美の起源』大河内昌訳、『英国十八世紀文学叢書4 オトランド城／崇高と美の起源』研究社。
- ベールシュトルド、ジャック、ポレ、ミシェル (編) [2003]、『十八世紀の恐怖一言説・表象・実践』飯野和夫、田所光男、中島ひかる訳、法政大学出版局、
- ボーコック、J. G. A. [1993]、『徳・商業・歴史』田中秀夫訳、みすず書房。
- 星野太 [2022]、『崇高のリミナリティ』フィルムアート社。
- 山崎正和 [1983]、『演技する精神』中央公論新社。
- [2003]、『社交する人間—ホモ・ソシアピリス』中央公論新社 ([2006]、中公文庫)。
- ヤンソン、トーベ [2011]、『新装版 ムーミン谷の仲間たち』山室静訳、講談社文庫。

[欧語]

- Burke, Edmund [1757], *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, London: R. and J. Dodsley. (2nd ed. [1759], with Introduction “On Taste”)
- [1997], McLoughlin, T. O. and Boulton, James T. (eds.), “A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful”, in: *The Early Writings, The Writings and Speeches of Edmund Burke, Vol. I*, Oxford: Clarendon Press, pp. 185–320.
- Clare, John [1821], *The Village Minstrel, and Other Poems*, 2 vols., London: Taylor and Hessey.
- Kant, Immanuel [1790], *Kritik der Urteilskraft*, Berlin and Libau: Lagarde und Friedrich.
- Lang, Berel [1992], “The Representation of Limits”, in: Friedlander, Saul (ed.), *Probing the Limits of Representation: Nazism and the “Final Solution”*, Mass.: Harvard University Press, pp. 300–317.
- Nye, David E. [1994], *American Technological Sublime*, Mass.: MIT Press.
- Vincent, David [2020], *A History of Solitude*, Cambridge: Polity.
- Wordsworth, William [1850], *The Prelude, or Growth of A Poet’s Mind; An Autobiographical Poem*, London: Edward Moxton.